



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	妊婦看護職における職業性ストレスおよび自己管理行動とその関連要因〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	日野, 真莉絵
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(看護学)
Dissertation Number	甲第16335号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94973
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Marie_Hino_abstract.pdf, 論文内容の要旨



様式 8

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士(看護学)

氏名：日野 真莉絵

学位論文題名

妊婦看護職における職業性ストレスおよび自己管理行動とその関連要因

I. 背景

妊婦看護職は、他職種と比較して周産期異常リスクが高い。交代制勤務や夜間勤務、長時間労働、重労働、立ち仕事、抗腫瘍剤や滅菌剤等の化学物質への曝露、感染症患者との接触等は、死産や流産、早産、切迫流早産、子宮内発育遅延、先天性胎児奇形、母体の妊娠高血圧症候群、妊娠糖尿病等の異常リスクを有意に高める。看護職はこれらの危険業務を複合的に担う職種であり、特殊かつ過酷な労働環境が彼女らにおける異常リスクに悪影響を及ぼしている。一般に、母胎に健康被害を及ぼし得る危険業務は、労働基準法や男女雇用機会均等法等の母胎保護制度により制限・禁止が制定されている。一方、看護職においては、職場の人員不足や繁忙さによって、これらの制度が十分に活用されていない。それゆえ、妊婦看護職における労働環境改善や母胎保護制度見直しの必要性が繰り返し訴えられているものの、未だ具体的な解決策は検討されていない。

妊婦による適切な自己管理は、周産期異常リスクを軽減する最も効果的な方法の一つである。特に、危険な環境下で就労する妊婦看護職における自己管理の重要性が強調されている。しかし、妊婦看護職は自己管理の実践に障壁を抱えている。彼女らは、妊婦の身体で仕事をこなすことに心身の多大なる負担を抱える一方で、一医療従事者としての責任感から、支援を必要としている患者や容態が急変した患者を目の前にすると夢中でケアに勤しんでしまう。また、繁忙かつ人員不足の状況では、自らが仕事を制限したり休暇を取得することが職場や同僚、患者に迷惑をかける最大の要因になると懸念している。こうして、彼女らは母胎への健康不安や痛み等の自覚症状があろうとも、一看護職としての役割を果たそうと無理な業務にも邁進してしまう。このような看護職に特有の職業性ストレスおよび社会心理的要因は、自己管理を困難にし、異常リスクを上昇させる要因の一つと示唆されている。妊婦看護職が周産期異常を予防し、職業性ストレスをコントロールしながら安全に就業を継続するためには、彼女らにおける自己管理実践の支援が重要である。妊婦看護職における職業性ストレスおよび自己管理の実態とその関連要因を深く探索し、効果的な支援方策を検討する必要がある。

II. 妊婦看護職における自己管理行動とその関連要因：横断研究

看護職における妊娠中の自己管理行動と関連要因を検討するために、妊娠中又は産後の看護職 232 名を対象に質問紙による横断研究を実施した。質問紙では、個人属性、妊娠・出産状況、自己管理行動質問票、労働状況、ソーシャルサポート、Sense of Coherence 等を測定し、単変量および多重回帰分析を用いて分析した。研究の結果、参加者における自己管理行動の内、“知識とセルフモニタリング”や“異常の予防”に関する項目得点は最も低く、彼女らに対する情報提供や健康教育、およびセルフモニタリング支援の必要性が示された。

多重回帰分析の結果、自己管理行動には、初経別、超過勤務、母胎保護制度の取得、上司のサポート、家族のサポート、胎児優先の信念が有意に関連した。母胎保護制度の適切な活用や社会的支援の享受、胎児を優先する重要性を学ぶことは、妊婦看護職らの効果的な自己管理実践に寄与する可能性が示唆された。

Ⅲ. 妊婦看護職における職業性ストレスとその関連要因：他医療従事者、フィジカルワーカー、デスクワーカーとの比較横断研究

妊娠中の看護職における職業性ストレスレベルとその関連要因の特徴を、非看護職との比較を通して検討することを目的に、1,060名の就労妊婦を対象に質問紙による横断研究を実施した。測定項目には、Brief Job Stress Questionnaire、仕事状況、妊娠状況、自己管理行動質問票等が含まれた。参加者は看護職群と、その他の医療従事者群、フィジカルワーカー群、デスクワーカー群の4群に分類された。4群のストレスレベルをDunnett's test、Chi-squared test等により比較検討し、順序ロジスティック回帰分析によりその関連要因を検討した。有効回答847名の分析の結果、看護師群は他職種群よりも、いずれの妊娠期においてもJob demandが高く、Job controlが低く、高ストレス者の割合が高いことが示され、彼女らに対する支援の必要性が明確化した。看護職群の職業性ストレスには、頻回の超過勤務、少ない休憩時間、少ない上司のサポート、低い胎児優先の信念が関連した。特に、少ない休憩時間と低い胎児優先の信念は看護職群のみに認められた関連要因であった。妊婦看護職が職業性ストレスを調整して働くには、超過勤務を回避し、うまく休憩時間を確保しながら、胎児を優先して働く事の重要性が示唆された。

Ⅳ. 妊婦看護職における自己管理困難感尺度の開発と心理的特性の評価

妊婦看護職における自己管理に対する困難さを測定するために、自己管理困難感尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検証した。本研究は、第一段階(尺度原案の作成)、第二段階(予備調査)、第三段階(本調査)を経て実施された。結果として、“妊婦であり看護職である闘い”、“管理方法のわからなさ”、“管理の限界”、“胎児優先の信念”の4下位概念24項目の尺度が開発された。項目分析、探索的因子分析および確認的因子分析の結果、尺度の信頼性と妥当性が確認された。

Ⅴ. 結論・臨床への示唆

以上の研究結果から、妊婦看護職における職業性ストレスおよび自己管理の実態とその関連要因が示され、彼女らに特化した、周産期異常予防のための自己管理支援策を開発、実装する必要性が明確化した。具体的には、妊婦看護職の高い異常リスクの実態や、勤務時間中における休憩時間の確保および超過勤務回避の必要性、胎児を優先して働くことの重要性等について、適切な知識を付与するための労働健康教育が必要だろう。加えて本研究では、妊婦看護職の職場におけるセルフモニタリングを促進する重要性も示された。これには、彼女らの実態に即したセルフモニタリング支援ツール等の開発や提供が有効である。最後に、妊婦看護職の自己管理実践には病院管理者および政策立案者の理解と協力も重要である。彼女らのリスク実態を把握し、業務調整に関する適切な支援や情報提供、また危険業務制限・禁止に関する一定の規定を検討することが必要だろう。